

直観と概念の観点からの学術論

A Theory of Art and Science in Terms of Intuition and Concept

南 雲 功*

Isao NAGUMO

要旨：直観を通して現象を概念化・体系化する活動を学、概念を個別事象へと具象化する活動を術とした。十九世紀から二十世紀にかけて様々な分野で普遍概念が崩壊し、学的活動の多くが後退したことにより、学術研究が術の活動となっている。しかし、学と術の明確な意識がなされないまま、功利的目的における学術研究が興隆を極めている。術は、個別事情に即して、経験と教養に裏打ちされた活動であるべきものを、学への意識により個別事情を一般化し、マニュアル的に対応されている。混迷を深める現代において、人間の理念を希求する学と、個別事情に即した術の再生を、学術の様態に求める時期にあるであろう。このような状況を踏まえて、日本古来の学術観を参考に、学と術のあり方について論考を行った。学を目指す目標を普遍におくのではなく、常に反省と修正が可能な理念におく学の再構築と、術者の人生の総合としての高みをめざす術への修練、さらに術の享受者の積極的関与などが求められるであろう。

キーワード：知識, 普遍概念, 体系化と具象化, 教養としての学, 芸術

1. 序

1.1 学の意義

学術と社会が相乗的に発展しており、一方で、自然災害、パンデミック、戦争、環境問題など、様々な諸問題が地球規模で発生し、あらゆる学問にその対応が迫られている。学問が、崇高で閉鎖的な象牙の塔に閉じ籠ることは許されず、社会の変化に即した処方求められる。一方で、根源まで遡り、時代を鳥瞰するような学の果たす役割はますます大きくなる。

同様に術は利便性、有用性の追求のみで許されるはずがないであろう。社会全体を俯瞰した術の発展が求められるはずである。そこで、まず次節で学と術の定義を行う。

1.2 学および術の定義

1.2.1 学の定義

広辞苑によると「学とは体系化された知識」(広辞苑第七版)とされている。同様にカントも

* なぐも いさお 放送大学教養学部在学, 文教大学付属生活科学研究所 準研究員

学について「体系的統一とは通常認識をはじめて学とするもの、すなわち認識のたんなる集積から一箇の体系をかたちづくる当のものにはかならない（カント・2012. 791. A832, B860）」と述べている。これらを参考に、「学とは体系化された知識」を作業上の定義とする。

1.2.2 術の定義

知識を体系化する目的の一つには、現実への応用がある。自然、社会、人文のいずれの学術分野、さらに社会活動、日常生活などの場面でも体系化された知識を使用することが期待される。このような学の実用過程は、知識の体系化とは逆に、概念の個別化、具象化の過程である。この過程を学に対して術と呼ぶ。次節では、学術の材料である知識について検討する。

1.3 知識

「知」の活用について既報にて論じている（南雲・2017）（南雲・2018）。本論では知識の定義から掘り起こすこととする。

1.3.1 知識の定義

西洋思想史のなかで知識とは、プラトンの定義が一般的である（戸田山・2002. 4）。プラトンは、『テアイテトス』の中で、知識とは「①正当化されていること ②真であること ③真であるとの信念」の三要素を満たすものとしているものとしている（プラトン・1974）。ところが、プラトンは三要素を検討していくことで論理的に循環の迷路に入り、結局、知識は「夢の上のこと（プラトン・1974. 394）」と、知識についての結論を避けている。その後の西洋思想では、この夢を追いつけている。プラトンの古典的定義への反例として、ゲティア問題（Gettier. 1963）が提案されている¹。知識について戸田山は、クワインの論文を引用しながら、「知識の基礎づけなんてできもしないこと（戸田山・2002. 164）」、「新しい認識論は学際的な分野としてスタートしていくしかないだろう（戸田山・2002. 251）」と述べているように、多様な学術的分野による総合判断によらなければ知識の正当化などはできはしないということである。このように知識を、知の「真」を確定しようとするならば、学の総体からの判断が求められることになり、知識に対して厳密な「真」を求めていくと知が幻想となってしまう。

1.3.2 真に関する知識と学の循環

学が知識の体系化であるならば、学を構成している知識が真でなければ学が成り立たない。しかし、個々の知識は自ら真偽判断および正当化ができないため、多様な諸学の審査により正当化されることになる。学を正当なものとするためには真の知識が求められ、知識の真を正当化するために、体系化された学の査証が必要である。この循環は、学と知識の相互作用により、学際的に拡大することになる。すると個々の知識には、学際的必然性が内在していることになる。すなわち、単独の諸学では知識の正当化能力が低い場合、個々の学的知識すなわち「専門知」には、あらゆる学に関係している。しかし、現実には学の専門化が進み、特定の学に属する知識の正当性は、所属する学にしかできないことが現状である。

1.3.3 知識の洪水

一方、学の専門化と個人活動の活性化により、現在、知識の洪水の渦の中で、自分の位置さへ見えない状況にある。自分に関係する知識のみが、どこまでも深く深更し、他の知識が見えても関連付け、体系化ができない状況で、はたして学が成立しうるのだろうか。現代技術によるAI（人工知能）であれば即座に分析し判断してくれるかもしれない。機械任せの期待と不安が、AI論議を賑わせている（南雲・2019）。知識の整理に人間が係らなくてもいいのだろうか。現代

の知識の洪水を治めるために、新たな手法によることも一法であるが、学が学らしくあった時代まで後戻りをして、ギリシア以来の使い古した概念を頼りに再構築を試みるのも一法であろう。本論では直観と概念といういささか古風な認識論の基本概念により、学術の再検討を試みる。次章では、直観と概念について述べる。

2. 直観と概念

既報にて直観と概念の特殊な関係について論じた（南雲、2022）が、本論では一般的な関係から論じる。

2.1 直観

知識は、経験に始まる。意識の外にある現象を認識するには、まず直観されなければならない。直観とは、対象の現象と意識が交わる場である。直観の場を意識しているのは主体であり、未だ価値や真偽判断などが行われておらず、ただ見たまま聞いたままの情報である。直観の情報は、記憶や感情などから多様な脳の作用により概念化が行われる²。ラッセルが「センスデータ（sense-data）」と呼んでいるものに近いが、センスデータには内的直観が含まれていない（ラッセル、2005、15、202）。同様にクオリアにも内的直観が含まれない。西田の純粹経験（西田、1950、13）という概念もあるだろう。脳科学の知見とは異なっているであろうが、本論における直観とは人間の営みを考察する上での認識論的概念である。

直観には、外的直観と内的直観がある。外的直観とは、外的現象が、感覚器官により直観の場に創出される。それに対して、快不快、痛みなどの生理的現象および、欲求など意識とは異なる心身の現象を意識することがある。これらの感情や、生理現象が意識に現れる場が内的直観である。内的直観により、自己の感情が意識に現れる。内的直観が対象となる学術は芸術、人文の分野が中心となるであろう。

2.2 概念

概念は、直観の個別経験から、意識へと構成され、個別概念となる。個別概念は、記憶されている概念の共通項により新たな上位概念が構成される。概念は言語や記号化することが可能となり、他者と共有することで、言語によるコミュニケーションが可能となる。言語や数字はすべて概念であり、学は概念により成立する。逆に、直観は伝達することができない。そのため身体知は、実体験により伝達される（野本、2003、19）。複数の個別事象が概念化される時、共通項目の集合として新たな概念が構成されるため、個別の特殊事情は排除される。概念化とは個別の特殊事情を捨てていく個人および社会の行為である。

個別概念は、異なる複数の上位概念に包括することが可能である。個別概念が一般概念となり、法則が見いだされ、普遍的真理へと体系化されていく。ところが、包括の過程には多様性が内在している。生物に関して、分類学、生態学、畜産学により、生物分類の構成が異なる。このように、概念化に恣意性が含まれることから、多様な概念の一般化、体系化である学が相対化されることになる。

2.3 概念化と具象化

ヒトが概念化の能力を獲得したのは、学習能力の向上であろう。個別体験を個々に記憶するよりも、概念として記憶することで、記憶量の節約になるとともに、汎用性が広がる。さらに、伝達可能性の向上がある。概念化した知識体系は言語化により、仲間や、子孫に伝えることができる。

概念を現実を利用するために、現象へ具象化されなければならない。この場合、上位概念は概念の個別化の作業により、下位概念へと個別化し、具象化される。概念化の過程で破棄した個別事情を新たな対象に適応した形で、加えていかなければならない。

次章で概念の体系化としての学と、学の具象化としての術について検討する。

3. 学と術

3.1 知識の体系化としての学

知識が厳密に正当化できないにもかかわらず、学の材料は知識しかない。そのために、知識の蓋然性を高める方法論が学ごとに形式知あるいは暗黙知（ポランニー、2003.）として定められている。学的に正当化された知識が専門知である。知識が、専門知となるためには、多くの人の承認が求められ知識は客観的となる。この客観化された諸概念の共通項による概念化により、上位概念が形成し、体系化され、学が成立する。

3.2 知識の具象化としての術

3.2.1 学の対概念としての術

学が経験的直観から概念へと統一され、体系化されるのに対して、術は、学を実用に使用する活動である。応用、臨床などと呼ばれる。このような学に対する反対概念を本論では「術³」と定義した。自然科学に対する科学技術、生物学・医学に対する医術、数学に対して算術、美学には美術など、術は学の実用として、現実の世界へと具象化していく。

概念を具象化するためには、個々の具体的事象に合わせて個別化しなければならない。普遍化でそぎ落とした個別事情を付け加える作業である。経験を、客観化していく過程で捨てていった人間原理としての価値、意味、倫理などを術の作業で、総合的に加味されなければならない。具体例として物理法則に基づく工業技術の製品の場合、自然科学に限らず、法学、経済学、社会学、医学、保険衛生学はもとより倫理学、心理学、場合によっては歴史学などの諸学の知識を求めなければならない。その上、学にとどまらず、習俗、習慣、流行から人生観まで生活知に属するあらゆる知識によって個別事例に適応していくことになる。

3.2.2 学および術の単独化の弊害

学を学ぶことは、客観性、普遍性が高いことから、一定の手順を踏めば術に比べ短期間に習得することが可能である。この学的知識を術的過程の多くを省略して実用化することも、一定のレベルにおいて可能である。しかし、このような具象化は、概念化の過程で遺棄したものを蘇生する作業が画一的に行われている。いわゆるマニュアル化である。この場合、個別事情を規格に合わせることになる。しかし、どうしても合わせられない事例、または、合わせるべきではない事例がある。例えば、医療、教育、芸術などが挙げられる。

逆に学的体系化のなされていない術も可能である。経験の積み重ねにより個別対応が適切に行うことができる。しかし、経験から予測できない大きな変動があった場合、一般原理がないこと

から、未熟な術者にはうまく対応できないことになる。

3.2.3 学と術の調和

学と術は、逆向きのベクトルである。しかし、現実には、優れた職人ほど内省の中に概念化、一般化されている。しかし、言語化することは、身体知の多さに断念するだろう。実技の中で伝承するしかない。優れた学者も、つねに現実の象が頭の中にある。たとえば新たな理論構想時には、仮想モデルがところの中に展開しているだろう。

術の個別性のために、成果物には作者の精神が反映される。すると被術者（術を受容する者。使用者、患者など）は術の成果物に隠されている術のところを汲み取ることにより、術者と被術者の間に互いに研ぎ澄まされた精神のぶつかることを経験することがある。このことは、芸術において顕著である。そのために、術者、被術者ともに高い教養が求められるようになる。マニュアル化した術には、術者と被術者との間に暗黙の対話は生まれにくい。一方、学者は、使用状況を想定して知識の体系化を行うにしても、時空を越えた普遍的知識は、どのような場面で使用されるかを想定することは不可能である。せいぜい、学者のできることは、術者に、あるいは市民に、学の内容、および危険性を正しく伝えることであろう。一方、術者は、幅広い教養と想像力により、適格に個別の被術者に知識、物、感性を伝えなければならない。

3.2.4 芸術の術性

創作、舞台、音楽などの外的現象を伴う芸術は、術性が顕著である。しかし、文学などの文字情報による芸術は、本などの紙媒体ではあるにしろ情報そのものは外的現象を伴わないため、概念の範囲の中の活動であるかのようにみえる。しかし、芸術一般に、作者、演者の感情の動きを、直観を通して意識の概念へと導き、諸芸術の表現形式に応じて、観客、読者の外的直観から意識の概念を通して内的直観へと働きかけ、感情に作用するものである。あるいは、芸術表現を通して直接感情に訴えることもできる。この場合、概念を通さず、外的直観が内的直観に作用することになる。このように芸術そのものは、術であり、個別事情を、充分想定しなければならない。

3.3 学の公開性と術の秘匿性

学が正当性を高めるためには、多くの批判が必要となり、必然的に公開性が求められる。これに対して術は、その妥当性が成果物という実在が現れることから、過程の公開の必要性が低い。また、術は実利と直結するため、術の独占傾向から秘匿される。さらに、設計などの過程を経たとしても術と成果物の接触する場においては、概念より直観の比重が高まり、秘匿性が高くなる。

4. 西洋の学術と日本の学術

西洋では、学と術を明確に分けたことにより、精神の高みをめざす行為はもっぱら学によるものであった。一方、術は職人の仕事であり、近代初期までは芸術においてすら職人の仕事であった。このため、貴族向けの舞台芸術の観客は、演者という職人が演じてる劇よりも、観客に見られることを意識していた。青山は、西洋の歌劇場が、観劇に不都合な馬蹄形をしているのは、観客に見られる客席の構造であると述べている（青山, 2017, 45）。しかし、日本においては、術における修練の先に道があり、人生を極めるというように考える。当然、極めた結果は人それぞれ異なるが、その成果物に触れることにより人となりがわかるのである。そこで、西洋と日本の学術の差異について検討する。

4.1 西洋の学術

4.1.1 西洋の学

西洋において、学と術が分離していた理由は、古代ギリシアのポリスにおける市民生活の影響が大きい。市民階級の成人男子のみが、市民として公的領域に所属し、生活に関する実用的な術に関することは、家族と奴隷の仕事であった。市民は、政治、戦争、学問の活動に専念している。このような市民の中で、思考、観照などの思索が行われ、体系化された学が成立する。このことから、学は高貴な行為、術は下僕の行為という学術観が生まれ、この差別的学術の分離は近代まで形を変えて伝わっている（アレント、1994.）。十一世紀末ごろから西洋各地に学の中心となる大学が設立される。大学では文法、修辞学、弁証法、算術、幾何学、天文学、音楽の自由七芸（リベラルアーツ）⁴からはじまり、神学や哲学の研究生活に入る。

西洋の学の特徴である普遍化を、ユダヤキリスト一神教に求める説もあるが、その始まりは多神教の古代ギリシアの思想形式であることから、寺田も述べているように、風土的要因が大きいのではないだろうか（寺田、2011. 136）。普遍を求める風土と一神教の相性がよかったのであろう。

4.1.2 西洋の術

西洋の術について、古代の著名な発明家はアルキメデスであろう。アルキメデス（B. C. 287?-B. C. 212）の術に関する逸話として、多数知られているが確証できる事実はほとんどない⁵。数学、物理に関する論文の写本等が現存し、研究の対象が現認できるのは、学の分野のみであることから、重要な発明者をすべて著名な天才であるアルキメデスの功績にしたことが考えられる。ローマ時代になると、建築をはじめとする、実用的技術が優位になるが、その担い手は奴隷であった。奴隷の労力が期待できなくなると、十二世紀に各種産業機械が発明される。十二世紀には動力水車が製粉から製鉄に使われ十三世紀に入ると極限に達し多くの産業分野で画期的な技術の発達が見られ中世の産業革命が起きている（三輪、2012. 41）。さらに十八世紀に産業革命が起きるが、発明、改良の担い手の多くは、学と縁のない職人たちであった⁶。工学部が大学に設立される時期が、学の分野に比べて著しく遅いのは術への蔑視の表れであろう。しかし、市民階級が力を持つことにより、実業と結びつく術が注目される。国民国家が成立し、軍事が工学と結びつくことが明らかになると、エコール・ポリテクニクが、フランス革命のさなかに1794年に設立されている。現実の産業が科学を刺激していく。蒸気機関の効率化を求めて熱力学が成立し、製鉄所の温度管理の要求から量子力学の発端が開かれている。二十世紀に科学の知識が技術革新への有用性に気付き、科学と技術の一体となった発展に結び付く。

4.1.3 西洋的学重視の特徴

学が重視されると汎用性が増すことになる。知識が概念化されたことにより、文字情報として伝承が可能となり、作業の共有化と効率化が図れる。さらに、少ない教育により、最低限の作業、すなわち作業のマニュアル化が可能となる。反対に、より普遍性の高い概念を応用しようとする、個別事例に適用すべく何段階もの個別条件を加味していかなければならない。

知識が学として体系化されるためには、複数の客観的知識が必要である。体系化された学の表現として、法則、原理などの命題や公式となって現れる場合もある。自然、社会系の学問だけでなく、哲学においても、第一原理、定言命法のような表現がなされる。こうしてできた学は、さらに諸学を包括する普遍的学問が想定され、この究極的学の探求が目指されるということが、西洋流の学問観である。シェリングは『学問論』の中で、諸学を普遍的学の下に位置付けている（シ

エリング、2022. 21)。このように、西洋の学問はプラトン以来、普遍的学を求めている。しかし、今日、専門化が進み、学全体を一つの普遍概念の下に構築することはますます難しくなっている。ウェーバーもすでに十九世紀末に専門化への対応を述べている（ウェーバー、1936. 22）。

4. 2 日本の学術

西洋以外にも多様な文化圏で、学と術が相互に影響しながら発展してきた。中東圏、インド文化圏、中国文化圏の重要性を無視するわけにはいかない。しかし、本論においては、中国文化の影響下にありながら、250年に渡り、海外の影響が極端に狭まり独自の学術を発展させた日本の学術を取り上げ、西洋の学術と比較することにした。日本の学術の特徴は、西洋の学優位に対し、術の優位が挙げられる。

4. 2. 1 日本の学

日本の学は、文字、儒教、仏教などが大陸から伝来したことから始まる。伝来は、文字だけでなく、人的にも僧侶や各種技術者が渡来している。701年大宝律令の制定に伴い、中央に大学寮、地方に国学・府学が設けられた（辻本、沖田、2002. 21）。これらは研究機関ではなく、教育機関としての役割が大きく、官僚養成のための経書が教育されている。

中世の教育は寺を中心とした経書教育が主体であり、そこでは武士への教育がなされている。寺の他にも、足利学校、金沢文庫、名越文庫などの学的施設が設立されている。農業や戦などの術を生業としていた武士が、貴族階級に代わって統治するには、教養と知性が求められる（高山、2022. 60-62）。こうして、学は実践的術に対する教養としての立場となる。

江戸時代には、長期にわたる平和が実現し、学術の普及が一気にすすむ。学の分野においては、儒教の流れである朱子学の経書購読が中心である。幕末には、より実践的な陽明学が広がりをみせる。また、日本独自の学である、国学が発展するが、西洋近代のように普遍を理念とする学の立場ではなく、教養的な立場であった。蘭学が解禁されたとき、宗教色のない実用書が中心であった（高山、2022. 99）。明治以降、学の啓蒙に尽力した福沢諭吉も実学を推奨する（福沢、1942）。

現代において、数学、物理学の分野で普遍を目指す学が、宗教に影響されず世界の最先端の成果を上げていることには、注目に値する。

4. 2. 2 日本の術

先史時代から、生活の各場面で学術が利用され教育されていた。大型建築から土器制作、狩猟から農作業など生きていくための技術が言語知および身体知で伝承され発展されていたことは考古学遺跡や研究により明らかである。

古代から戦国期まで時代に即した術の発展を見せるが、江戸時代になると、実用から教養まで多様な術が発展を見せる。古典重視の学から生活に直結する術に一層重心が移動した時期ともいえる。さらに、産業以外の学術分野で、全国規模の連や講のような私設研究会ができていく。田中は「江戸時代の『文人的あり方』は、私塾の学問を基本にしたものと、商人や農民にまで広がった動きとがあって、非常にすそ野が広がったのです。実践していることも学問、漢詩、俳諧、文章、絵画、書、音曲に及び、文人とは実践を伴う生き方の名称でした（田中、松岡、2021. 142-143）」と述べ、学術的交流の場としての「連」をあげている。代表する俳諧や和算の連や講で行われてきた。和算においても、真理追求でなく、個別の問題に対し、互いに批評しあうことにより高めあうことが中心となる（南雲、2021.）。つまり、普遍的真理を追究することではなく、

個人の力量を深め、互いに刺激しあうことにより、個々の高みを目指す研究会であった。そこで目指すのは、共通の目標ではなく、個々に異なるものをめざしていた。

4.2.3 日本的術重視の特徴

直観で得られた経験の積み重ねから新たな術に対処する場合、一般化の過程を経ていないことから、独断的になりやすいとされてきた。しかし、個別情報から得られた雑多な情報がすべて活かされることから、個別事例の遺棄される事項が少なくなる。そのため、個別対応がより実状に即したものになる。ただし、そのためには長年の習練が必用となり、術者の個性が強調されやすくなる。

5. 学と術の調和をめざして

西洋における普遍を目指す学と、応用としての術の分離は、知識を一般化し、広範な応用に活用することで成功した。しかし、すでにその弊害が顕在化している現在において、学と術の新たな関係について考察する。

5.1 学の術化、術の学化

現代においても学を高尚なもの、術を低級なものとの意識が残っている。そのため、本来、術であるべきものを学とする意識の持つ弊害は、個別対応しなければならないことを一般化してしまうことにある。個々の事情に合わせた対応が求められているにもかかわらず平均的思考しかできなくなる。

逆に学が術化している。学は、個別の事例を一般化していくことを本来の目的としていた。しかし、学が著しく専門化した背景には、学本来の目的から、術の目的へと変化していったことがある。多くの学的研究ですら当初から実用目的の明示が求められる。そのため、普遍的知識の探究ではなくなっているのである。これが学の術化である。このことで学に要求されている普遍を根底に見据えた専門化が、普遍を欠く専門化のみになっている。このため、一層、学の術化が促進される。学の術化と術の学化が相俟って現代の学術が構成されているのではないだろうか。

5.2 創造的学術と習得的学術

学術には二つの側面がある。新たな知識の獲得をめざした創造的側面と既存の知識を習得する側面である。術の場面では、習得と想像が、ほぼ同時に行われる。どのような高尚な術においても、既存の学術その他の知識の学習と実技が含まれており、そこに新たな発想が加わることにより、創造的術が生まれる。直観と概念の総合である。ところが、学では全く異なる様相を示す。学の習得は、体系化の追認として行われるが、創造の追認とはかなり異なるものであろう。学の創造は、新たな概念の体系化であるところから、論理に対して超越的なものが含まれる。つまり、学において、創造と習得が分離しているのである。習得は、教育により可能であるが、創造は、特別な才能が要請されているであろう。

5.3 創造的学の終焉

学の入り口である知識の正当性が幻想であったように、学を目指す普遍的真理の存在自体が崩壊してしまった。アレントは、すでにデカルト的懐疑の中に真理の存在を疑っていると述べて

いる（アレント、1994、439）。あらゆる事象への懐疑は、学を近代化したが、その中にすでに崩壊の種が埋め込まれていたということである。十九世紀には、ニーチェが「神は死んだ」と述べている（ニーチェ、2017、191）が、これは宗教的な意味に留まらず、普遍的真理消滅の比喩でもある（森、2018、53-54）。ウェーバーは、政治経済に翻弄される学間に警鐘を鳴らしている（ウェーバー、1936.）。現象学のエポケー（判断中止）も真理の到達不可性を表している。具体的には、真理にもっとも近いとされてきた数学の世界では、非ユークリッド幾何学はルジャンドルが18世紀には発見しており（寺坂、2014、65）、二十世紀にはゲーデルによる不完全性定理で自然数論が無矛盾でないことが証明されている（ゲーデル、2006）。物理学では量子論と相対論の発見により、古典物理学の真理性が崩れた。政治学でな民主主義から全体主義が生まれ、アダムスの古典経済学は、マルクスやケインズなどにより修正を余儀なくされている。このように二十世紀初頭を中心の一つひとつ普遍的真理の可能性が崩れていった。そして、普遍性を根底におく学的研究は数学および物理学を除いて⁷ほとんど姿を消してしまった。

5. 4 新たな学と術

創造的学なき術の発展であるならば日本的学術モデルが参考になるだろう。つまり学と術を逆向きのベクトルとするのではなく、学を術のための教養とするのである。もちろん創造的学の研究は行われるが、その成果は、全人類の知識とし、術のための教養的知識として、説明しなければならぬだろう。

このような術のための教養としての学であるならば、二十一世紀の混迷の時代にあって新たな時代の羅針盤として再び学の理想に向かった活動が再開してもよいのではないだろうか。その学が目指すのは、いつでもどこでも変わることのない普遍的真理ではなく、学術全体の総括的な理念のようなものになろう。例えば、人格の尊厳、世界平和のような内容かもしれない。普遍と異なり理念は常に監視し不都合があれば変えていかなければならない。反省と改善の繰返しにより、より良いものとなるはずである。したがって、どのような総括的学となるか未知であるし、目標を達成することは困難である。未知の理念に基づくとは、総括的探求にすべての学術関係者のみならず、すべての生活者が参加することを意味する。

術者も術としての誇りを持って、個別事例に対処すべく精進しなければならないだろう。個別事例においては、専門外、想定外などの言い訳はゆるぎされない。ただの勉強不足として反省しなければならないだろう。

5. 5 主観性の術

主観的立場にある分野は文学を含む芸術と宗教であろう。科学的世界観のみを真とする立場では主観性を忌避し、個人の内面から主観的に包括していく立場には立ちにくい。このことは、学の近代化の中で切り捨てていったものである。しかし、近代以前には、宗教は、学そのものであった時代もある。近代化を経験した現代においても、多くの芸術愛好家があり、多くの熱心な宗教信者がいることを考えると、たんに自然主義的立場から主観性を切り捨てるのは、学本来の趣旨（総括的理念）からは、不適當である。芸術においても政治社会を動かす強力な力を秘めているが、宗教においては、現実の社会問題として顕在化している。実際には政治的経済的問題が複雑に絡み合っているのであるが、どうしても互いに排除性が現出しやすい。宗教多元的（ヒック、2008）な立場での信仰もひとつの解決策であろう。これらの主観的行為についても新しい理念の

学は包含していかなければならない。すなわち、新たな学の理念は、科学、社会、人文、芸術、宗教など人間の知的活動に関する事項を包括するものになるであろう。そのような学に基づいて個別対応の術への精進を術者、被術者ともに求められるであろう。

謝辞

本研究は、文教大学 2022 年度学部共同研究「教育学の学問と科学における位置づけ」(研究代表者：八藤後忠夫)の南雲担当分の一部であり、研究助成をうけていることを付記する。

文献

- 青山昌文 (2017) 舞台芸術の魅力. 東京, 放送大学教育振興会
- アレント, H. (1994) 人間の条件. 志水速雄訳. 東京, 筑摩書房
- ウェーバー, M. (1936) 職業としての学問. 尾高 邦雄訳. 東京, 岩波書店
- カント, I. (2012) 純粹理性批判. 熊野純彦訳. 東京, 作品社
- ゲーデル, K. (2006) 不完全性定理. 林晋, 八杉満利子訳. 東京, 岩波書店
- Gettier, Edmund L. (1963) Is Justified True Belief Knowledge?. *Analysis*. 23 (6), 121-123
- 斎藤憲 (2006) よみがえる天才アルキメデス. 東京, 岩波書店
- シェリング, F.W.J. (2022) 学問論. 西川富雄, 藤田正勝監訳. 東京, 岩波書店
- 高山正也 (2022) 図書館の日本文化史. 東京, 筑摩書房
- 田中優子, 松岡正剛 (2021) 江戸問答. 東京, 岩波書店
- 田村松平編集 (1967) ギリシアの科学. 東京, 中央公論社
- 辻本雅史, 沖田行司 (2002) 新体系日本史 16 教育社会史. 東京, 山川出版社
- 寺坂英孝 (2014) 非ユークリッド幾何の世界, 新装版. 東京, 講談社
- 寺田寅彦 (2011) “日本人の自然観”. 天災と日本人. 東京, KADOKAWA
- 戸田山和久 (2002) 知識の哲学. 東京, 産業図書
- 南雲功 (2017) 知恵の研究試論. *生活科学研究*, 39, 287-292
- 南雲功 (2018) 知恵の研究 (1). *生活科学研究*, 40, 161-166
- 南雲功 (2019) 人と AI の共生をめざして. *宗教研究* (慶応宗教研究会), 32, 62-69
- 南雲功 (2021) 江戸数学流行の背景と現代. *宗教研究* (慶応宗教研究会), 34, 74-82
- 南雲功 (2022) 直観なき概念. *生活科学研究*, 44, 85-90
- ニーチェ, F. (2017) 学問の愉しみ. 森一郎訳. 東京, 講談社
- 西田幾多郎 (1950) 善の研究. 東京, 岩波書店
- ネット, R., ノエル, W. (2008) 解説! アルキメデス写本. 吉田晋治監訳. 東京, 光文社
- 野本和幸 (2003) フレーゲ入門. 東京, 勁草書房
- ヒック, J. (2008) 宗教多元主義. 間瀬啓允訳. 京都, 法蔵館
- 福沢諭吉 (1942) 学問のすゝめ. 東京, 岩波書店
- プラトン (1974) “テアイテトス”. プラトン全集第 2 巻. 田中美智太郎訳. 東京, 岩波書店
- プルターク (1953) 英雄伝. 河野与一訳. 東京, 岩波書店
- ポランニー, M. (2003) 暗黙知の次元. 高橋勇夫訳. 東京, 筑摩書房
- 森一郎 (2018) 現代の危機と哲学. 東京, 放送大学教育振興会
- 三輪修三 (2012) 工学の歴史. 東京, 筑摩書房
- ラッセル, B. (2005) 哲学入門. 高村夏輝訳. 東京, 筑摩書房

注

- 1 ゲティア問題について戸田山は「知識の古典的定義には、反例がある、というものだ。反例というのは、知識の古典的定義にある三つの条件をすべて満たしているのに、とても知識とは呼べないような例のことを意味している。反例があるということは、知識の古典的定義は知識をうまく定義できていないということで、ようす

- るに失敗だったということだ (戸田山. 2002. 58)」と解説している。
- 2 直観は英語で intuition であり、直感と同じである。ドイツ語では特に哲学分野では Andschauung を直観として Intuition と区別している。西洋思想史の中では直観に知性を含めることが主流であるが、カントは知的直観を排除し、感性的直観のみを採用している。本論の直観はこの意味でカントに近い意味で使用している。
 - 3 術とは、目的を達する手立て、手段、方法を意味する語で、解字によると、「行」と「朮」からなり、「朮」は整然とある行為を維持させていくためのみち、てだてを意味する (新漢語林第二版)。術の英語は art が対応している。art の対語は science (学問) であるが、西洋では本来 science は神の創造したことの探究であり、art は人間の制作物に対応させている。
 - 4 中国では、六芸が該当する。六芸は周代に士以上が学ぶ技芸。すなわち礼 (道德)、楽 (音楽)、射 (弓術)、御 (馬車術)、書 (書道)、数 (算術) である。西洋の七芸に比べ術的性格が強い。
 - 5 アルキメデスの逸話の出典は、以下である。ヘウレーカ (わかったぞ) はウイトルウィヴス (B. C. 80-B. C. 15)、スクリュウ型の汲み上げ機はディオドロス (?- B. C. 21)、ローマとの戦争における武器の発明出はプルタルコスプルタルコス (46-127) などであり、アルキメデスの生存年 (B. C. 287 頃~ B. C. 212) に比較しても死後 100 年以上経過している (斎藤. 2006) (ネッツ, ノエル. 2008.) (プルターク. 1953.) (田村編集. 1967.)。
 - 6 三輪は「ヨーロッパでは長いあいだ技術者の社会的地位は低く、学者や知識人から軽く見られていた。しかし産業革命で技術者は社会に大きく貢献したので、技術者の中に地位向上を求める動きが出てきた (三輪. 2012. 116)」と述べている。
 - 7 数学および物理学が普遍を求め続けられる理由は、古典法則が新法則の近似として包括していく学問の特質によるのであろう。